

# 令和元年度 読書感想文コンクール 入賞者紹介～小学生～

		最優秀賞	優秀賞	佳作
小 学 校	1年	1年生は今年度行っていません		
	2年	山下 絢可 「ヘレン・ケラー」をよんで	高橋 海斗 「まほうのじどうはんばいき」 をよんで	新道 咲彩 「きみ、なにがすき」 をよんで
	3年	前田 寛人 「エジソン」を読んで	安井 百々杏 「ズートピア」を読んで	南 虎之介 「三本足のタロー」を読んで
	4年	上葛 友聖 「ウエズレーの国」 を読んで	野本 千絵 「しゅくだいクロール」 を読んで	樋口 悠 「野生のロボット」 を読んで
	5年	加藤 みひろ 「ぼくとベルさん」 を読んで	伊藤 權 「君たちはどう生きるか」を 読んで	野崎 蓮花 「ナイチンゲール」を読んで
	6年	佐々木 爽汰 「大村智ものがたり～苦しい 道こそ楽しい人生」を読んで	高山 志 「青いスタートライン」 を読んで	上葛 華音 「命がこぼれ落ちる前に」 を読んで

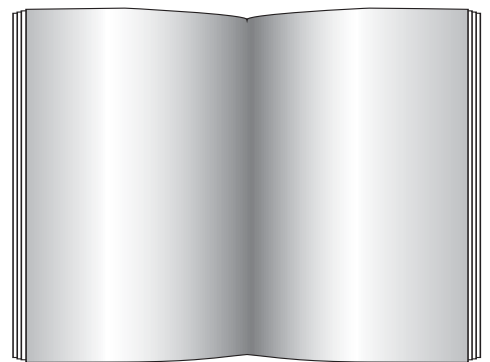
三重苦って何？って思ったのがきっかけでこの本をよむことにしました。

ここに出てくるヘレン・ケラーは、目が見えず、話すこともできませんでした。わたしは、ヘレン・ケラーが、どうやって大人になったんだろうと考えました。

ヘレン・ケラーは、さいしょは、手づかみでしょくじをとったり、言いたいことがつたわらずにかんしゃくをおこしたりと、とてもかわいそうな人に見えました。

「ヘレン・ケラー」  
をよんで

月形小学校2年  
山下 絢可



しかし、サリバン先生との出会いがヘレン・ケラーを変え、手話をおぼえたり、点字をおぼえたり、サリバン先生の口のうごきをまねして話すことをおぼえたりと、すごいどりよくをしました。

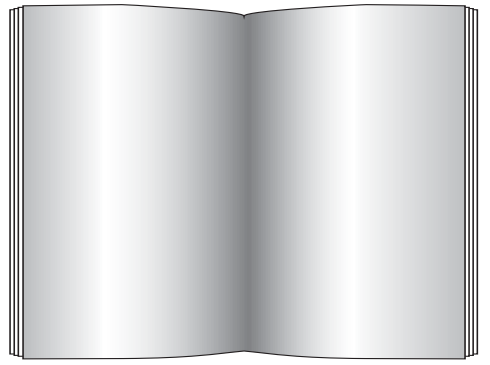
ヘレン・ケラーは、大人になつてからは、しょうがいしゃのきょういくや、ふくしのはつてんに人生をささげました。

わたしだったら、ヘレン・ケラーのような生きかたは、できなかつたと思います。目が見えないとわかっただけであきらめていたと思います。

じつは、わたしは、赤ちゃんのときにたくさんにゆういんして、びょうきが見つかりました。今でもびょういんにかよい、びょうきとつきあっています。

でもわたしは、目も見えないし、耳も聞こえるし、ことばもはなすこともできます。これからわたしは、色んなことをべんきょうして、すてきな大人になりたいと思います。





### 「エジソン」

を読んで

月形小学校3年

前田 寛人

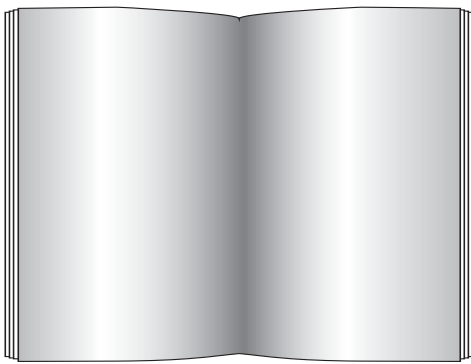
きに思っていました。何日も電になった所もありました。一日電気がつかないだけでも大へんだったので、電気はとても大切だと思いました。

今のぼくたちの生活に、なくてはならないもの。そのひとつが電気です。エジソンは色々なものを発明しました。今のラジカセやレコーダーのもとななる、ちく音き、そして何より、くらい夜を明るくしてらす電きゅうを作ってくれました。昨年のいぶり東ぶ地しんで、北海道全ぶがいて電になるブラックアウトになりました。ぼくの家は、一日で電気がついたので、明かりのひとつもない夜空を見て、「星がきれいだなあ」とのん

そんな、大切なものを作ったエジソンですが、かれは小さなころから「なぜ?」「どうして?」と何にでもきょうみをもつ男の子だったそうです。そしてやがて、べんりな物をたくさん発明し、「発明王」とよばれる人になるので。エジソンは、小さいころは、色々なものにきょうみもちすぎて、学校のべんきょうのじやまをして「学校に来ないで」と言われてしまいます。ですが、エジソンのお母さんが、けっこんする前は学校の先生だったので、家でもべんきょうすることができました。お母さんは、エジソンがすきそうな本をたくさん買ってくれました。エジソンが10さいになった時、「しげんと実けんの教室」という本を買ってくれました。その本の中でみつけたせい電きにきょうみもち、せい電きやかみなりまでも電気のなかまだと学び、べんきょうや実けんが大すきになりました。

大むかしは、電きゅうがない時代、人びとは、ランプかろうそくを使って家の中を明るくしていましたが、どっちも火を使っているの、やけどや火事の心配がありました。大人になったエジソンは、「もつと安全で、明るい光があるといいな」と思いました。このころ、電氣を使うと光ることはわかっていました。が、電きゅうを作るざいりょうのねだんが高すぎたり光つてもすぐ消えたりでまったく使えるものではありませんでした。エジソンは、けんきゅうとしつぱいをくり返して日本の竹を使って電きゅうを作ることのせいこうしました。はじめて作る事にせいこうした電きゅうに、日本の竹が使われていると知って、とてもびつくりしました。電きゅうと同じように、電線や、発電所もエジソンが作って、ようやく町に明るい電氣がつかました。

なっています。ぼくは、えいがか大好きなので、エジソンが発明してくれてよかったと思いました。エジソンの言葉で「九十九回しつぱいしても百回目にせいこうすることもある」とあります。あきらめずに電きゅうを作ってくれたので、夜も明るくすことできます。ぼくもにが手な物があっても、あきらめずにちようせんしたいです。



### 「ウエズレーの国」

を読んで

月形小学校4年

上葛 友聖

「あの子ったらかわいそう。いつも一人だけはみだしてるわ」と、お父さんとお母さん

の言葉がとても気になって、この本を読んでみました。主人公のウエズレーは、自分でもなっとくするくらい町で他の子と何もかもちがつている男の子です。かみ型も、好きな食べ物も、みんなとちがうから友達がいまいませんでした。でも、いやがらせをしてくるいじめっ子はたくさんいました。それで一人ぼっちのウエズレーが夏休みの自由研究を盛大に取り組んで自然に友達をたくさん引き寄せた、気持ちがあつさりするお話です。

いつもからかわれていたウエズレーはかしくて、ひらめきがすごくて、ぼくはおどろくことがたくさんあります。

まずは、夏休みの自由研究に、文明が栄えるためには、良い作物が必要だと学校で習ったことを思い出して、自分だけの作物を育てて、自分だけの文明を作ろうとひらめいたことです。ぼくの自由研究はいつも大好きな工作を作っているから、自分だけの文明を作るなんて思いもつきません。そしてウエズレーは、ひらめいただけではなく、畑をたがやすことから始めて、

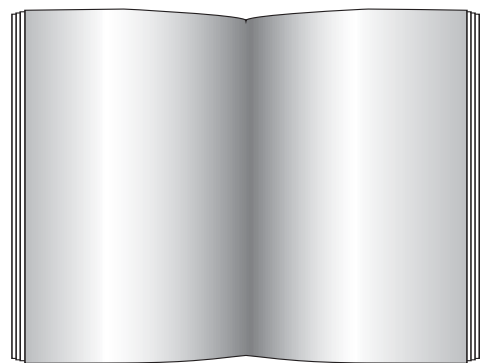
行動力もすごいなと思いましたが、

次に、百科事典にもつていないモモとイチゴとリンゴがまざった甘い味の作物を作ってしまった事です。ぼくは果物が好きなので、そんな種類の味がする実を食べてみたいと思いました。しかも、その実をしぼって一日中味わうジュースの飲み放題は、夏に最高だろうなと思いました。

最後に、「機械」を作ってしまったことにもとてもおどろきました。作物のくきから取ったせいで軽くてやわらかい服やぼうしを作った事もすごいと思ったけれど、せんいをあむはたおりの機械を作ったことにもおどろきました。とてもかしこくて根気強くて新しいゲームや道具、時計、種から作ったインク、新しい言葉や数え方など次々に発明して、「ウエズランディア」と自分の庭に名前をつけました。初めは遠くから見ていたいじめっ子たちも、ウエズレーの文明に引き込まれて自然と仲間になっていく様子はとてもうれしくて、ワクワクしました。いじめっ子の気持ちまでガラリと

変えたことは、一番おどろいたし、とてもスッキリとした気分になりました。

ぼくは、ウエズレーから教えてもらった事があります。それは自分のひらめきを大切にして、根気強く行動することです。ぼくは、すぐにあきらめてしまふけど、あきらめない気持ちを大切に行動していると、何か新しい発見があるかもしれないと思いました。それと、人たちがう事が多くて変わり者だと仲間外れにすることは、とてもはずかしいことだとも思いました。これから僕はたくさんの人と出会うだろうから、一人一人大切に仲間になりたいと思っています。最後に、夏休み明けに一人ぼっちじゃなくなつたウエズレーに「友達が出来て本当によかったね。」と声をかけたいです。



「ぼくとベルさん」  
を読んだ

月形小学校5年  
加藤 みひろ

私がこの本を選んだ理由は、「読み書きができない少年」と書かれているのを見て、この少年のことが気になったからです。

この少年の名前は、エディでした。エディは、数字が得意だけれど、読み書きはできません。だけど、発明家のベルさんやヘレン・ケラーとであつて、あきらめないでやるうという心が変わっているいるなことを挑戦していくお話です。

私がこの本を読み終えて一

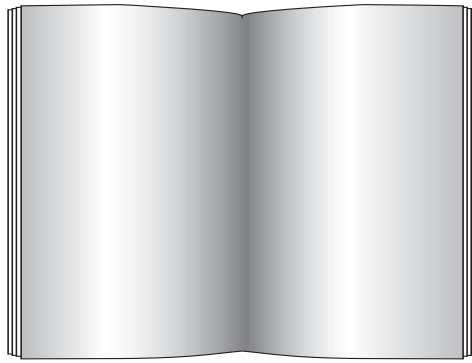
番最初に思ったことは、エディは、苦手なことをあきらめないでがんばっていてすごいと思いました。エディは、ベルさんから手紙と本をもらいました。そのもらった本は、哲学者のむずかしい「ゼノンのパラドクス」という本でした。それでもエディは、その本を一生けん命読んでいました。手紙も7回書き直して、ベルさんに手紙を送りました。私だったら、むずかしい本だと思ったら本は読まないかもしれないけど、手紙はすぐに送れると思います。でも、エディは読み書きができないので本を読んだり手紙を書くのがとても大変だったと思います。本当に、強い心をもっていると思いました。

私が、心に残つたのは、ベルさんがエディに言った、「人が何かをできるようにするのは、できるようにしたいと思う心があるからだ。人が本気でできるようにしたいと願うときに、その想いを止められるものは何一つない。」という言葉です。この言葉は、とてもいい言葉だと思います。言葉がとても前向きで、この言葉を言われたらがんばりたいという気持ちにな

ると思いました。もう一つベルさんが言った前向きな言葉は、「失敗っていうのは友達ちでもあるんだ。」です。エディと同じように私も最初は、「エ？」と思い、意味がわかりませんでした。話を続けて読んでいくと、失敗から実に多くのことを学ぶことがわかりました。たとえば、これではうまくいかないということも学びます。すると別の新しいことに挑戦してみようという気になります。そもそも失敗することがなくなったら、挑戦がなくなってしまふから、挑戦がなくなるとも失敗することがなくなるとも思いません。私も、水泳が初めはできませんでしたが、でも何度か、うまくいかなくてもプールで練習したらできるようになりました。失敗おそれないで挑戦することが大切だと思いました。ベルさんが「失敗にも感謝しなくちゃいけない。」と言っていました。私も聞いた時、そう思いました。私は「失敗は友だち」と「失敗は成功のもと」とい

うことわざが似ていると思いましたが。

最後に私が学んだことは、人はそれぞれ苦手なことはちがうけれど、失敗をしながらがんばって挑戦し続けることは、みんないっしょだということですよ。私も強い心をもって、あきらめないで挑戦できる人になりたいです。



「大村智ものがたり  
『苦しい道こそ  
楽しい人生』  
を読んで」

月形小学校6年

佐々木 爽太

かつて、アフリカで、ある病気が大流行していた。その患者の数、2億人。それを救っ

た一人の男の物語。ぼくは重い病気にかかったことはない。けど、人生は何が起こるかかわからない。ぼくもいつか、この人のように、たくさんの人々を救うかもしれない。そう思っ、この本を選んだ。

大村智先生は、農家の家に生まれ、昔からたい肥づくりを手伝っていたという。微生物との出会いはそこからで、それが将来につながっていく。ぼくは子ども時代にやった経験が将来につながるようになるほどなと思った。ぼくには将来の夢が特にないから、今のうちからいろいろなことをすれば、将来何かに役立つかもしれない。「これも一つの手法か」と思った。

心に残ったのは、大村先生がいろんな分野で功績を残している人と出会っていること。いろいろな人との出会いが、大村先生をノーベル賞へと導いたのかもしれない。人との出会いが大切なんだなあと思った。そして、「たくさんの人から学び、支えられることで自分は生きていくんだな」と改めて感じた。

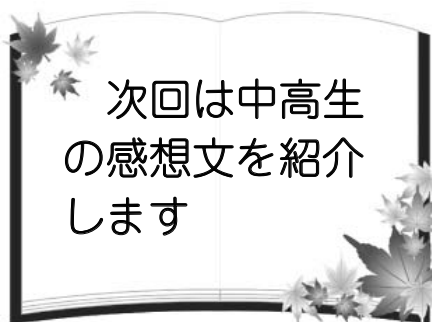
進めていて、1974年に、「エバーメクチン」という科学物質が発見された。それは、少量飲むか注射するだけで、動物の体内の寄生虫が退治できるといふもの。それを読んだぼくは、「本当に一回でいいのか？」と不思議に思った。だが、エバーメクチンの発表会で大村先生はこういう。「効くから一回なのだ」これにはそのまんまだなと思ったが、たしかにとも思った。

この薬が人間にも効くともわかって、エバーメクチンを「イベルメクチン」として無料で配布されることになった。これにはぼくも感動した。世界の中の日本という小さな国で一人の男が中心となり、偶然発見された一つの科学物質が2億人を救うことになったのだから。

この功績が認められ、大村先生は、ノーベル生理学・医学賞を受賞した。前にも書いたのだが、日本の一大学の教授が、たった一つの化学物質で2億人をも救ったのだ。ここまででくるのには、相当な努力が必要だと思う。大村先生をそばで支えたたくさんの人がいたからこそ、ここまでこ

れたのかなあと思った。

ぼくはこの本を読んで、「挑戦すること」のすばらしさと、「人との出会い」の大切さを教わった。そして、努力は必ず報われる、その努力が大きいほどやりとげることがは大きいのだと感じた。ぼくはまだ子どもだから、たくさんの経験をして、これからの長い人生を生きていくのだろう。たくさんの人と出会って、ときには失敗もして、それでも何とか前を向いて生きていきたいと思った。いやなことにも挑戦して、いつかは大村先生のようなすばらしい人になりたいと思った。



次回は中高生の感想文を紹介します

## 令和元年度 読書感想文コンクール 入賞者紹介